荒木山通信

2024年4月
第20号
北房文化遺産保存会
（文責）畦田正博

報告

荒木山西塚古墳　発掘調査終了！

北房文化遺産保存会副会長　奥田　健治

元気で事故無く終了が一番の成果！

第一次（R４）と第二次（R５）の二カ年に渡る荒木山西塚古墳の発掘調査が三月一六日に無事終了しました。二年間で実働七〇日間（29日＋41日）の発掘舞台でしたが全員無事故で幕を下ろすことができ、安堵感で一杯です。「元気で無事故が一番の発掘成果だね。」が終了下山途中、畦田会長との会話です。多分保存会をはじめ関係者一同も同感だと思います。

発掘の技や知見を垣間見た貴重な七〇日間の成果

約二年前の四月一三日、別な場所の緩斜面で行った事前の試掘練習が遠い昔のことのようで、長旅に感じられたのは私だけでしょうか。一般参加者への指導が課せられていた会員にとって不安な船出から一年半、各自は発掘の素人から今や手慣れた腕でガリやバチ、手スコなどの発掘機材を見事に使い分けできるまでになりました。二年次には、「もう十分指導者ですよ。」と市教委新谷俊典調査員の評価を得るまでの上達です。さらには試掘坑（トレンチ）の「壁立て」の重要性、「地山」までの掘り下げの手順、土器片などの「遺物出土時」の確認手順、試掘終了時の「記録・写真撮影」の処理方法等々、専門調査員の技と知見の奥深さを幾度となく垣間見ることができた充実の七〇日間でした。今では第三次・四次の調査も辞さずの意欲も見えます。

中学生を指導する保存会員

市外からの加入会員や一般参加者、小・中学生との貴重な交流は大きな成果

現在会員七三名中、市外会員が三〇名（41％）、女性会員が一九名（26％）、中学生三名（市外二名）と地元一色の出発当時から思えば多様な仲間組織になりました。何より嬉しかったのは、県南の岡山・倉敷から彼、彼女たちの熱心な会員や一般参加者と会うたびに皆が自然に打ち解け合い、話に花が咲き、話題が拡がり新鮮な感覚に満ちた発掘現場になったことです。

また、古墳活用に当たり魅力的で斬新なアイデアを訴える地元中学生に勇気をもらったり、幼少期からの古墳巡りで知識を磨き考古学の楽しさを伝える県南の中学生たちと支える保護者の温かさに胸を打たれたりしました。これら多様な主役との交流で得た経験は、保存会員の刺激になりました。

発掘現場は交流の場

協働作業「コンソーシアム」による事業成果は、現地説明会で花開く！

振興局からのピストン輸送のバスから降りる参加者を「まにぞう（真庭市のキャラクター）」に身を包んで歓迎する中学生。笑顔で迎える女性会員。自作の写真入り展示パネルで広報啓発した記録係の会員。出土遺物の説明に徹する市教委調査員。各トレンチ（四カ所）で現地説明に燃えた会員とそれを裏方でサポートする会員。当日の円滑な運営に力を注いだ振興局員と保存会事務局員の見事な連携協力。これらは三月二日の現地説明会での一コマです。専門家定番の現地説明会では見られない姿です。「西の明日香村コンソーシアム」による民学官協働事業だからできたのです。加えて午前中は中学生と同志社大学院生の仕掛けで飛鳥時代の束帯（役人の服）をまとっての演劇風フォーラム（パネルディスカッション）の開催や古墳関連グッズの紹介等、

まにぞうの出迎え

若者の活躍は協働事業による新たな成果です。

飛鳥時代の衣装でのフォーラム

終幕近くに荒木山麓に吹き込んだ北風で寒さに震えた参加者の体を温めたのは、前日仕込み地元女性の会の手による美味しい豚汁のもてなしでした。「西の明日香村クッキー」も好評でした。

以上、事業成果の一端をお伝えしました。課題もたくさんありますが今後の検証評価に託したいと思います。ご協力いただいた全ての関係者の皆様に深謝申し上げ、終幕といたします。なお調査結果の詳細は、後日作成の「調査報告書」にご期待下さい。

※第一次発掘調査（R４年度）概報はできており、真庭市のホームページからダウンロードすることができます。

（保存会事務局調べ）

２年間の主な関係者の参加延べ人数（人）			
	R4	R5	合 計
真庭市教委	36	49	85
北房振興局	76	58	134
同志社大学	31	42	73
北房文化遺産保存会	475	513	988
一般参加者	113	67	180
学生（駒澤・同志社大）	58	12	70
中学生（2年）	34	35	69
小学生（6年）	32	26	58
小ＰＴＡ	9	・	9
現地説明会	97	67	164
サポーター	20	18	38
合　　計	981	887	1868

（この他に報道関係者４５、見学者１１０）

「西の明日香村」を目指して

令和六年度 北房文化遺産保存会 総会

一月二八日(日)、北房文化センターで、令和六年度の北房文化遺産保存会総会を開催しました。遠くは、岡山市や倉敷市からの参加もあり、会員四十数名が令和五年度の事業・決算・監査報告、六年度の事業計画や予算・役員改選などについて話し合いました。

令和六年度事業計画

㈠ 荒木山西塚古墳第二次発掘調査（後半）
二月一六日～三月五日（予備日）三月七日～一二日
○現地説明会　三月二日

㈡ 西の明日香村・ガイド養成講座
古墳・史跡での現地ガイド実習も予定。

㈢ 谷尻遺跡発掘五〇周年記念事業
市教委・北房振興局・文化遺産保存会の共催で。

㈣ 「西の明日香村づくり」活動計画策定事業
「西の明日香村づくり検討委員会(仮称)」を設置し、私たちの目指している「西の明日香村」の具体的な姿を描き、活動計画の策定を行う。

㈤ 広報紙「荒木山通信」の発行
四・八・一二月の年三回。会員・地域・関係機関等に配布や回覧。

令和六・七年度役員

会長　畦田　正博
副会長　奥田　健治
同　平城　元(新)
名誉顧問　久松　秀雄(新)
顧問　平井　典子
幹事　井原　隆志
同　宮田　美輝
幹事　上谷　仁志
同　原田　重隆
同　平　義男(新)
同　伊藤　義則(新)
同　山本　肇(新)
同　南條　靖(新)
庶務　三輪　能章(新)
同　小林　展弘
同　梶上　守(新)
会計　志田　浩一
監事　山崎　和光
同　大植　昭一(新)

（新）：新役員

以上一九名の体制です。よろしくお願いします。

午後は、講演とパネルディスカッションで会員研修を行いました。

講演

「美しい日本を探る」と題しての戸村彰孝先生（当会前顧問）の講演は、四季の歌からの「赤とんぼ」と「冬景色」を皆で歌うところから始まりました。川端康成の「美しい日本の私」では文芸作家の眼からの美。芭蕉の「奥の細道」などからは、俳人や茶人などの美、芭蕉：さび、利休わび、世阿弥：幽玄。また、道元や一茶、一休の句、井伊直弼の「茶の湯一会集」など

も取り上げられ、いろんな人のいろんな美について、人それぞれの美があるとユーモアを交え、飄々とした語り口でのお話でした。歴史だけでなく万葉集などの古典にも造詣の深い戸村先生の多くの引き出しの中の一端を味わわせていただいた一時でした。

講演中の戸村先生

パネルディスカッション

「中学生にとっての古墳の魅力」について、奥田副会長の司会進行で、中学生会員の板東郁仁君（岡大付属中一年）と山﨑弘大君（私立岡山中二年）が発掘調査に参加しようと思ったきっかけや理由、日頃取り組んでいること、発掘で学んだこと、他の小中高生に伝えたいことなどテーマに沿って話して行きました。また、中学生の眼から見た保存会の活動への提案などもありました。

「案内がないと遺跡に訪れにくい。親しみがもてるようゆるキャラを作ったら。若い人を対象にしたイベントも。遺跡が有名な他地域とのコラボを考えみては。」なるほどと思えることがいっぱいで、今後に生かして行きたいものと思いました。

中学生会員によるパネルディスカッション
（左　板東君、右　山崎君）

荒木山西塚古墳発掘調査 ～参加者から～

※二カ年に渡って取り組んだ発掘調査もこの三月一六で終了しました。参加された方から感想などを頂きました。

荒木山西塚発掘参加記

笠岡市
網本　善光（会員）

有名な小説の冒頭ではありませんが「市境のトンネルを抜けると北房でした」。

令和五年十一月。荒木山西塚古墳の発掘調査に参加すべく、笠岡市の自宅を出発した日の私は、期待と緊張にあふれていました。

何しろ、真庭市北房地域です。しかも、荒木山西塚古墳です。夏に開催された「北房文化遺産ガイド養成講座」を受講したときから、待っていたのですから。

私がこの古墳の発掘に関心を持つのには、いくつかの理由があります。

一つ目が、北房地域への素朴な疑問です。

北房と言えば、「ホタル」、「コスモス」そして「ぶり市」と、キーワードが次々に浮かびますが、私にとっては国指定史跡「大谷・定古墳群」です。

谷筋を進んだ最奥部に突如として現れる大谷一号墳。五段の列石と整備された石室の迫力には圧倒されます。

古墳と聞くと「盛り土」のイメージですが、この古墳はまさしく「石」の構造物です。

中津井川の対岸に築かれた定古墳群と相まって、この地にこれほどの古墳が築かれた理由は何なのか？

前方後円墳が造られなくなり、円墳などの古墳そのものが極端に少なくなっていた七世紀に、この地域に集中して、整備された古墳が築かれているのは何か理由があるはずです。

二つ目が、北房地域への学問的興味です。

旧北房町が編纂した『北房町史』（平成四年）は、他の地域に住む者にとっても多くの気付きと驚きを与えてくれる一冊です。

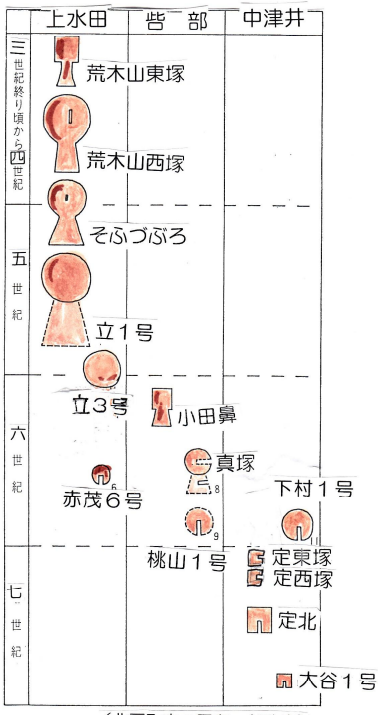
中でも、北房地域の古墳（首長墳）の変遷図は注目です。なぜならば、三世紀後半頃から七世紀に至る「古墳時代」を通して、北房地域内で場所こそ変わりますが、大型で特色ある古墳が連綿と築かれているのですから。

すなわち、荒木山東塚・西塚古墳の築かれた三世紀後半頃から四世紀。立一号墳の築かれた五世紀。小田鼻古墳や真塚古墳の六世紀。そして、定古墳群・大谷一号墳の七世紀です。

古墳時代は、古墳の形態（前方後円墳・前方後方墳・円墳・方墳）と規模によって、各地の有力者が序列化された社会（「前方後円墳体制」と言います）だったと考えられています。

荒木山東塚古墳が前方後

首長墳の変遷



（北房町史の図を一部改変）

方墳であり、次いで荒木山西塚古墳が前方後円墳として登場。さらに、大型の前方後円墳(立一号墳)があり、方墳(大谷・定古墳群)で締めくくられます。

『古事記』や『日本書紀』などからは分からない具体的な地域の歴史の、まさに「証人」として、これらの古墳が残されていることは大きな驚きです。

私は、北房地域は古墳時代を解明する「モデル地域」だと思っています。全国的にも貴重で、学問的興味が尽きません。

けれども、調査に参加させていただいて、別な関心を持ちました。三つ目が、この「北房文化遺産保存会」の熱量です。

古墳の調査にあたり、大学や行政との調整をはじめ、発掘作業に伴う準備や段取り。頭が下がります。

調査参加初日に印象深い経験をしました。参加者に荒木山西塚の説明はもとより、この調査の意義について丁寧なガイダンスをして下さったのです。

調査中も、出土した石材や付近の遺跡について、会員の方から詳しいお話を聞かせていただきました。まさに地元の方だからこそ知る貴重な「情報」です。

荒木山古墳は住民が主体となって調査しているのだ、という気概を感じました。

また、地元の小・中学生も調査に参加。土器を見つけて歓声を上げる子どもたちには、一生の「宝」となる経験だと思います。

地域の歴史は、地元のことをよく知る人たちによって「掘り」起こされ、専門家が「評価」し、次世代に「伝える」ことが理想的だと、私は考えています。

加えて、私のように地域外の者も調査に参加させて下さることは、大変ありがたいことです。ガイド養成講座受講をきっかけに入会させていただいた私ですが、魅力ある北房地域を、真庭市はもちろん、全国に発信できるお手伝いができれば、これほどうれしいことはありません。

今年度は「西の明日香村づくり」活動計画の策定も予定されています。魅力的で、学術的にも評価の高いこの地域の魅力がさらに高まるよう、お手伝いできればと思っています。

引き続きよろしくお願いいたします。

(記　R6年2月)

古墳の発掘に参加して

真庭市　畦田　真理(小5)

今日(二月一八日)は、荒木山西塚古墳の発掘調査がありました。私は、家族と参加しました。

初めはT3トレンチのふるいがけでした。母と弟としました。掘られた土をふるいに入れてガサガサゆすりました。すごく力が入りました。茶色の土器っぽい破片があり、土器だったらいいなと思って聞きました。

「土です。」と言われてちょっとがっかりしました。しかし、その後何と土器の破片も見つかり、出た土器を置くところに置きました。とてもうれしかったです。

ふるいがけの次は、トレンチの掘り下げをしました。昨日、T3のトレンチから土器がたくさん出たとのことで、期待しながらガリで掘り始めました。白い大きな石がたくさんうまっていました。

「これは何なのですか。」と保存会の人に聞くと、「おそらく昔の人がやったんじゃないかと思うけどなあ。」と言われました。

石の近くをほっていると、五センチくらいの灰色っぽい大きな土器の破片が見つかりました。大きいし、形が少しまがっていたので、「つぼとかの破片じゃろう。」と弟が言っていました。こんな土器は見たことがなかったので、私はとてもびっくりしました。

他の人が掘っていたT2のトレンチからは、去年の発掘調査の時、鉄器が出てきたそうです。見ることはできませんでしたがすごいと思いました。

今日の発掘体験で、私は昔の人の生活にふれることができてとてもうれしかったです。これからも発掘に参加したり、北房の古墳を守っていきたいです。

御領古墳群①

倉敷市
山﨑　弘大（中二）

こんにちは、保存会一年目、中学二年生の山﨑弘大と申します。ぼくは、広島県福山市の御陵古墳群について、シリーズとして投稿させていただこうと思います。文章が拙い部分もありますが、最後まで読んでいただければ嬉しいです。

１　御領古墳群とは

御領古墳群とは、広島県福山市の御領地区に所在する古墳群で一〇の支群（東から　大東・張田・奈良原・上御領中組・八畳岩・上御領下組・下御領。宝童寺・国分寺裏山・表山）の合計二五〇基程度からなります。弥生時代の墳丘墓から古墳時代終末期の石室まで、約五〇〇年にわたって古墳が築造されました。

これらの古墳は、長年にわたって存在が忘れられていましたが、市民団体「御領の古代ロマンを蘇らせる会」によって再発見・整備が行われ、注目を集めました。会の活動によって、前方後円墳や大型石室墳などの重要な古墳も見つかったそうです。

ちなみにですが、古墳群の麓には、国道３１３号線が通っています。気づいた人も多いかも知れませんが、高梁から北房を通って蒜山方面へ抜けるあの３１３号線です。意外な共通点がある御領古墳群ですが、今回はそのうち大東古墳群と張田古墳群を紹介しようと思います。

※１　何度か本文中で登場する「番外×号墳」・「消滅×号墳」は、御領の古代ロマンを蘇らせる会独自の呼称で、それぞれ「古墳かどうか確実でない地形や、古墳の可能性がある石材」・「かつて古墳があったことは確実だが、消滅してしまったもの」を指します。

※２　古墳の番号は、原則　書籍「御領発　古代ロマン　遺跡・古墳・砂留（御領の古代ロマンを蘇らせる会2015）」に準拠します。そのため、広島県の遺跡地図とは番号が異なります。ただ、大東古墳群は上記書籍の発刊後に改名されているため、書籍「探索！御領の古代ロマン①　大東古墳群～古墳時代の夜明け～（御領の古代ロマンを蘇らせる会・金光教徒社2018）」も参考にしています。

２　大東古墳群

大東古墳群は、御領古墳群のうちもっとも東、岡山県との県境に位置する古墳群で、ベタッと低い墳丘を持ちます。後円部の南東には不自然な石敷き遺構がありますが、正体は不明です。個人的には、祭祀の遺構だと考えていますがどうでしょうか。出土品としては、墳丘斜面より弥生後期の土器が表採されており、集落跡に古墳を築造した可能性があります。また、墳丘の様子が弥生墳丘墓に似ているので、古墳時代以前の築造の可能性があるそうです。

一号墳から尾根を登ったところにあるのが四号墳です。こちらは墳頂に建つ天神社の影響で墳丘がかなり削平されています。ただ、尾根の形状を見るに、一号墳のような形をしていた可能性があります。また、神社境内には竪穴式石室の石材を流用したような石積や叩くと金属音がする平石など、興味深いものが確認されています。しかも、〝大型器台〟または〝特殊器台〟の一部と考えられる土器が表採されており、なかなかのポテンシャルを秘めています。

更に北側、集落の裏山に所在するのが二号墳です。現状の墳丘は楕円形ですが、大きく盗掘を受けており、改変が著しいです。ただ、この古墳も前方後円形を示す可能性が指摘されており、今後の調査に期待です。

【大東大仙山古墳】

二号墳の西に所在するのが大東大仙山古墳です。全長四七ｍの前方後方墳ですが、後円部に建つ大仙神社によって改変を受けています。この古墳の特徴は、前方部がバチ型に開く、初期の形態をしていることです。つまり、北房の荒木山東塚古墳と同時期の築造です。また、大仙神社の床下には、主体部の可能性のある平石が露出しています。古墳の大きさや露出した石材から推定するに、主体部は縦穴式石室でしょうか。改変を受けてはいるものの、初期の前方後円墳の形状が分かるので、個人的におすすめです。

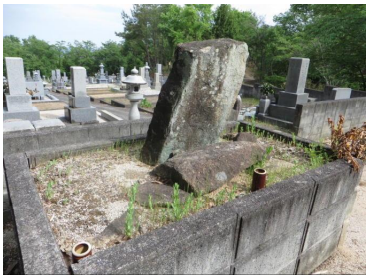
大東大仙山古墳の周囲には、二基の小古墳が知られています。前方部に接する三号墳と後円部に接する番外四号墳ですどちらも小墳丘の古墳だと考えられます。このうち、三号墳は墓地造成で破壊され、箱式石棺の部材が墓地の端に移築されています。これらの古墳は、大東大仙山古墳の陪塚とも考えられています。

この他にも、墳丘状の地形や石だらけの台状地形、急斜面に朱塗りの壺が埋納

された地点など、様々な興味深い遺構が確認されています。

これらの古墳は最近発見されたばかりで詳細が分かっていません。しかし、ロマンを秘めた面白い古墳群だと感じます。大東大仙山古墳・番外四号墳及び三号墳の石棺石材は常時見学できますが、一・二・四号墳は私有地のため残念ながら見学できません。

麓から大東大仙山古墳までは案内看板が設置されています。しかも、駐車場があるので気軽に訪問できます。貴重なバチ型前方後円墳を見に、御領の地を訪れてみてはいかがでしょうか。



【大東3号墳】

＊「3　張田古墳群」以下は、次号二一号に掲載の予定です。お待ちください。

高校三年生
松尾芭蕉　奥の細道

戸村　彰孝

私は毎日、ＮＨＫラジオの深夜放送に耳を澄ます。先日、懐かしい舟木一夫の「高校三年生」が流れてきた。

私の高校三年生は、昭和二十八年で戦後間もない旧制の落合高等女学校の校舎にあった。三年Ｂ組の教室は旭川に面した木造本館の二階で、下の道を行き交う人の群や旭川の上を飛び交う鳥たちの羽音も聞こえるような佇まいであった。

一見平穏な時を追想させるが、この年は若者を一喜一憂させるニュースで充ちていた。

手許にある「山陽新聞百四十年史」を開くと、

○　テレビ放送がＮＨＫ・民放ともに始まる。

○　中国からの引揚第一船・興安丸入港。

○　吉田首相のバカヤロー解散。

○　エリザベス女王の戴冠式。

○　スターリンの死とソ連の水爆実験公表。

○　朝鮮戦争休戦協定成立。

○　県内では、月輪古墳の発掘が目をひく。

身近な処にも大きな変化があった。四ヶ町村の合併による「**北房町**」の誕生である。上水田村・水田村・呰部町・中津井村・中井村が合併協議会を設け、最終的には中井村を除く四自治体が合意に達し、人口一万二千人を擁する新生の「**北房町**」が誕生したのである。その後、平成の大合併の嵐の中で真庭市に合併し現在に至った。合併の詳しい内容は幸せにも私の手許にある。ガリ版刷りの五〇頁に及ぶ、昭和二十八年十一月廿三日付の「岡山県北房町」と記された冊子に伺うことができる。しかし、七〇年以上経った今、その冊子に登場する人々の姿を見ることはできない。

ともあれ、激動の時代の高校三年生だった。毎日備中川に沿った国道３１３号のジャリ道、片道一二キロを自転車で隊列をつくり四十分かけて通ったのは昨日のことのように思い出される。あの頃は若かったのだ。

三年の秋だった。二時間目は、為貞節穂先生の「国語古文」。小柄でやさしい三十代の男の先生だった。

主題は「奥の細道」。

「芭蕉は、柿本人麿が歌聖と云われるように俳聖と云われ、日本文学史の上で金字塔の一人です。和歌ー連歌ー俳諧の流れの中で、**遊び**の俳句から**芸術**の俳句まで高めた人です。いわゆる蕉風を確立した開眼の句といわれるのが、皆さんもよく知っている〝古池や蛙とびこむ水の音〟です。平凡なようにみえるこの句のどこに注目したらよいのでしょう？　それは宿題として、彼の最も有名な吟行の旅を集成した『奥の細道』に入りましょう。生石さん読んで下さい。」

今紫と評判の瓜実顔できれいな黒髪の彼女が立った。

「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は日々旅にして、旅を栖とす。」

澄み切った声が窓のガラスをふるわせた。

今あの人は何処にいるのか一声がきこえる。

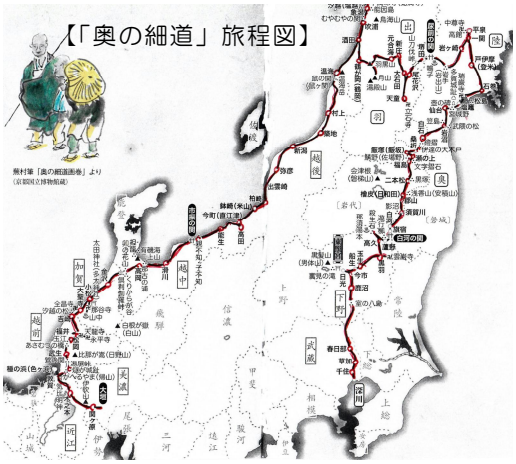
【芭蕉と曽良（奥の細道行脚の図）】

◎　私の選ぶ「奥の細道」の秀句三句

夏草や兵どもが夢の跡

閑さや岩にしみ入る蝉の声

荒波や佐渡によこたふ天河



【「奥の細道」旅程図】

ふるさと紹介

塩川の泉

中嶋ひろし

塩川の泉は蒲中街道は中津井の里、高機山の麓に湧き出る名泉である。

この里の東側の山々は高機山を中心に石灰岩と礫岩による地質であり、地中深くに在する水脈を流れ湧き出る水は、ほぼ一定の温度で夏は冷たく冬には温かく感じられる。透明な水はカルシウム等微量要素を適度に含み、美味しい水の要件を具備した水である。古来より命の源である飲み水として、また稲作等の用水として活用され、また街道沿いのこの泉は往来の人々のオアシスでもあった。

人々の身体に必要な塩と同様に、また生活に無くてはならない貴重な湧き水は、正に塩であり名称の由来とされている。

【塩川の泉と行者堂】

明治六年三月、右上手の山裾に塩川小学校が創設され、上中津井に於ける小学校教育の始まりの地でもある。美しい湧き水と菩薩様が祀られているこの塩川の泉は、正にパワースポットとして来訪者が絶えない。

※ 諡号：貴人や僧侶などにその死後、生前の行いを尊んで贈る名。贈り名。

※ 塩川小学校：中津井小学校の前身。明治一二年三月習之小学校（下中津井）に合併された。

中津井小学校の校歌

一、汲めども尽きぬ「塩川」の
泉は永久に芳しく
蛍集めん学び舎に
通ふもうれし夏の風
磨け精神をいざや共に

考えられる。

泉を中心に手前左側にこの世の安寧を願う地蔵菩薩様が祀られている。お願い事と共に手を合わせ感謝する事も気持ちの良いものである。右上段には霊験あらたかな神変大菩薩様が勧請されている行者堂がある。この菩薩様は、修験道の開祖とされた実在の人物であり、「役小角」と称した。

江戸時代、役行者没後千年忌にあたり生前の行いを尊び、光格天皇より「神変大菩薩」の諡号を賜った

「萬葉集」から見た古代（一）

三輪 能章

「萬葉集」は七世紀中頃から八世紀中頃までの約一〇〇年の歌を集めた日本最古の歌集で、大伴家持が中心となって編纂したとされています。原本は現存せず写本が今に伝えられています。

和歌の数は四五〇〇首余あり、全て漢字（万葉仮名）で表記され、それを後世の人が、漢字の横に片仮名を振り、訳文として今に伝わっています。しかし、その訳文も正解かどうかは詠んだ本人、または編纂した人しか解かりません。当時は、平仮名も片仮名もありませんから。

しかし、天皇から庶民までの歌が集められ、古代の人々の素直な心象表現にあふれ、言語・風土・植物・事件など、古代研究の様々な分野の資料として、日本最古の歌集は今も貴重な役割を果たしています。

さて有名な歌の原文です。

① 春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香具山

② 東野炎立所見而反見為者月西渡

③ 銀母金母玉母奈尓世武尓麻佐礼留多可良古尓斯迦米夜母

④ 春楊葛山發雲立座妹念

これらの歌を平仮名に訳したのが次の通りです。

① はるすぎてなつきたるらししろたへのころもほしたりあめのかぐやま

② ひむかしののにかぎろひのたつみえてかへりみすればつきかたぶきぬ

③ しろかねもくがねもたまもなにせむにまされるたからこにしかめやも

④ ・・・・・？（次回）

①は百人一首では、「はるすぎてなつ**きにけらし**しろたへのころも**ほして**ふあめのかぐやま」となっています。これは鎌倉時代の百人一首選者藤原定家が、平安時代末の新古今集の原文を当時の読み方を採用しているためです。萬葉集の読みは今でも？の箇所がたくさんあります。

さて、解りやすく漢字か

な交じりにしてみます。

① 春過ぎて、夏来たるらし、白妙の、衣乾したり、天の香具山

28番（持統天皇）

女帝持統天皇が、香具山に白い衣（采女の衣装）を洗って乾している風景を、藤原宮から見て初夏の訪れを詠んだ、女帝のおおらかで清々しく凜とした歌です。

香具山は「天の」といわれる通り古来より大和三山（畝傍山・耳成山・香具山）の中で最も神聖な山です。舒明天皇が香具山で国見・国誉めした歌が萬葉集２番目にあります。同じように五穀豊穣の神事が行われた後の風景かと思われます。持統天皇は夫の天武天皇が亡くなった後、太子草壁皇子も亡くなったため自ら即位し孫の軽太子の成長を待ちました。

そして次の②の歌。原文は十四文字です。

② 東の 野に炎の 立つ見えて かへり見すれば 月傾きぬ

48番（柿本人麻呂）

前述の軽太子（後の文武天皇）が成長し、安騎野に御狩のため前日に野営した。そして夜明け直前の様子を、亡き父の草壁皇子を月に、軽太子を太陽に見立てて随行した柿本人麻呂が詠んだ歌です。

しかし、この歌は難解です。この訳文は江戸時代の国学者賀茂真淵の訳文で通説になっていますが、鎌倉時代の僧仙覚お訳文は次の通り異なります。

あずまのの けぶりのたてる ところみて かへりみすれば つきかたぶきぬ

十四文字で三十一文字（五七五七七）に読み解くのですから、先人が如何に苦労したかわかります。

例えば「東野」を仙覚のように「東」＝「あずま」、「野」＝「の」、「炎」＝「けぶり」と詠むこともできます。真淵は「東」を「ひむがし」と読み、次に「野」「炎」を「のにかぎろひ」としたのです。このように、訳すためにはその風景や詠んだ時の状況などを考慮して読み解いたのです。「けぶり」と「かぎろひ」では随分情景が違います。

「かぎろひ」と訳した真淵は日が昇る時の「陽炎（かげろう・かぎろい）」になぞらえ、風景に奥行きと広がりを持たせ、亡き皇子の意志を継ぐ太子に希望を見立てたと思われます。

一音一文字で殆ど詠んだ歌③ 銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子にしかめやも

803番（山上憶良）

筑前国主山上憶良やさしい親の愛情あふれる歌です。この歌の前に長歌があります。いつもいつも子のことばかり思っていて安眠できないといっています。また、序文では聖人釈迦でさえ我が子を愛する心があるとしています。

そしてこの歌、「銀金玉などの素晴らしい宝」も子供という宝に優ろうか、いや優りはしない（「しかめやも」は反語表現）。子を持つ親なら今も昔も同じ心です。「銀・金・玉」はすでに「しろかね・くがね・たま」と当時通称されています。残りの文字は一音一字になっています。随分読み易くなっています。

山上憶良は遣唐使として中国に留学しています。儒教や仏教など最新の学問を学び、筑前国主を経て、最後には東宮（後の聖武天皇）の侍講です。仏教や儒教の思想に傾倒し、社会の矛盾を突く異色の社会派歌人でした。

さて④は、萬葉集原本中の最小文字数一〇文字の歌です。次回に訳文を載せますが、皆さんも訳してみてください。・・・・・。

俳句

（令和四年度）

古墳掘る

天野 光暉

三つほど古墳を抱き山眠る

墳頂のまともに受ける北の風

日輪の影のへんぺん枯木立

風寒し発掘バチと ガリで足る

枯草を剥いで古墳の土削る

古墳掘る又も邪魔する落葉かな

積み上ぐる土嚢の重し 冬ざるる

土嚢に座ししばらく休む 片時雨

陶片の赤き色なり風寒し

陶片を洗ふ手先の冷たさよ

染めきらぬ木の葉が顔に 北しぶき

裸木に少し間のあり 古墳掘る

北風や地山の土のまだ 見えぬ

古墳へと向かふ山路春の泥

うららかや墳土削るも 何もなし

春光や振ひに残る石ばかり

佇むと芽吹く雑木の 匂ひけり

※ 次号二一号は、八月末発行です。皆様からの投稿をお待ちしています。（西塚古墳発掘調査に参加しての感想なども）

古墳と神社と

津山市
行田　裕美

先日、津山から発掘調査が行われている荒木山西塚古墳をめざす道すがら、真庭市一色に所在する一色八幡古墳を久しぶりに訪ねた。久しぶりと言っても最初にこの古墳を訪れたのは、中国縦貫自動車道建設に伴う宮の前遺跡の発掘調査に参加していた一九七四（昭和四九）年のことであるから実に五〇年ぶりの再訪である。

【八幡神社参道の石段】

八幡神社参道の長い石段を登りきると、いきなり目に飛び込んでくるのが横穴式石室である。石段は昭和御大典記念として、一九二八（昭和三）年一一月に敷設されたものである。

石室は現存九ｍ、幅一・七ｍを測る無袖式である。時期は六世紀後葉から七世紀にかけてのものと考えられている。当該期における備中川流域での最大の石室墳である。

横穴式石室は本来盛土で覆われており、本墳のように石室の外観が見られるものは珍しい。盛土は全て流失し、石室の石組が露出しているのである。普段あまり目にすることのない奇妙な光景である。

この石室の北側に隣接して建てられているのが八幡神社である。八幡神社について、『作陽誌』は「八幡宮　一色村にあり、相い伝う、後鳥羽院の皇子ここに亡ぶ。窆穸（へんせき＝埋葬）の地、納経山あり。曽（か）て若田将監林兵庫というもの祠を立てこれを奉る。祭は九月十五日。この村の氏神なり。境内は東西三十間。南北五十九間。」と記す。

【一色八幡古墳と八幡神社】

すなわち、八幡神社は一色八幡古墳より後世の所産であり、両者の関係性は全くない。

岡山県内でも建立の契機や時期は別として、古墳の墳丘上に直接神社が鎮座する例がしばしば見られる。例えば、著名な岡山市の造山古墳（墳長三五〇ｍの前方後円墳、五世紀前半）前方部の荒神社、神宮寺古墳（墳長一五〇ｍの前方後円墳、四世紀後半）後円部の天計神社、赤磐市の両宮山古墳（墳長二〇六ｍの前方後円墳、五世紀中頃）前方部の両宮神社などである。また、ご当地の荒木山東塚、西塚の墳頂部にも小規模ではあるが、祠が設けられている。

古墳の墳丘以外にも隣接地及び周辺に位置する神社は相当数に上る。逆に言えば、神社の境内及び周辺には古墳が数多く分布しているということである。これらの神社の中には神宮寺山古墳の天計神社のように式内社も数多く含まれていることが知られている。

式内社とは、平安時代中頃の延長五（九二七）年に編纂された『延喜式』神名式に記載された二，八六一社をさす。当然のことながら、これらは全て延喜式編纂以前にあった神社である。一般的に古墳は七世紀代まで築造されているので、式内社は古墳埋葬祭祀が終焉した後あまり時を経ない時期には存在していたことは確かである。ではさらに遡って、古墳祭祀が営まれていた時期はどうだったのであろうか。

六世紀の中頃、日本に仏教が伝来し、七世紀になると各地に寺院建築が誕生していく。そして八世紀の中頃には諸国で国分寺の建立が開始されるなど、仏教が全国的に波及していくことになる。

古墳と仏教が融合した例としてよく引用されるのが、下一色二号墳出土の陶棺である。この陶棺は土師質の家形陶棺で、身と脚部に軒丸瓦の蓮華文を刻した粘土板が貼り付けられている。陶棺の年代は軒丸瓦文様の特徴から七世紀の終わりから八世紀の初め頃と考えられている。これは古墳祭祀が営まれている段階に、この地へ仏教が波及したことを証明するものである。

初期の神社信仰のあり様

【下一色二号墳出土の陶棺】

は、奈良県の大神（おおみわ）神社などに求めることができよう。即ち、現在のように本殿などの建造物はなく、神奈備型の山や巨岩、巨木などに神が宿ると信じられ、そのもの自体をご神体として崇拝するものである。この時点では建造物としての神社は今だ誕生してなく、祭祀は神籬（ひもろぎ）様の簡素な物で行われていたものと推定される。神社建築は、仏教の伝来による寺院建築の登場に連動して本格化して行ったものと考えられるからである。

このように古墳と神社は、仏教伝来による寺院建築の普及に触発される形で誕生した神社建築を介在させることにより関係性を有することになる。

古墳の築造は葬送儀礼に伴う祭祀の表現であり、地域の人々の信仰の対象でもあった。従って、古墳祭祀が行われていた時期に神社の機能を有した何らかの施設が墳丘上あるいは周辺に設けられていたことは十分に予測されることである。

神社のご神体は、神の霊が宿るとされる三種の神器であることが多い。三種の神器とは鏡・剣・勾玉である。これらは古墳に葬られた人への副葬品としても多用されている。古墳の被葬者への副葬品と神社のご神体は性格を共有しているのである。

古墳と神社の祭祀を奉斎した人々は、地域における同一共同体の構成員であったものと考えられる。

以上、一色八幡古墳の再訪を機に的外れかもしれない駄文を思いつくまま記した。御叱正をお願いする次第であります。

（荒木山西塚古墳発掘調査ワーキンググループ委員・サポーター）

双龍環頭大刀のレプリカ

大和路はるか

平成三年四月二日、金銅装双龍環頭大刀は、岡山県の重要文化財に指定された。

大刀が発見されて間なしに平方吉太郎さんが図鑑を見せてくれた。高知県の小村神社に伝わる双龍環頭大刀であった。大刀は一一五cmで、大谷一号墳の物より五cm長い。金銅装で鞘の模様も一致していると思われた。大刀は国宝に指定されていた。双龍環頭大刀は、蘇我氏との関係を思わせると言われ、山陰地方から多く出土しているとも言われる。大刀の環頭部分はたくさん出土しているが、全体が出土する例は少ない。北房の下中津井で発掘された土井二号墳では、頭椎大刀（かぶつちのたち）が出土したが、金銅部分のみが残っていた。この土井二号墳は、国道改良工事で発見されたので、岡山県が大刀を復元した。

いつ頃であったか、平井勝さんから大刀のレプリカの話があった。文化庁や岡山県の意向を踏まえてのことだったのだろう。こうした文化財は、全国の展示会で所有者が融通し合うのだという。その為、レプリカが必要だという。レプリカの作製は奈良の元興寺文化財研究所に依頼することになった。大刀を持参するため、赤田木工所で木箱を作ってもらい、その中へ収めて出発した。公用車の後部座席で、平井さんが木箱を抱えていた。長田和徳さんの運転で、まず平城京の発掘事務所に吉田調査室長を訪ねた。日曜日であったが吉田室長が待ってくれていた。平井さんが室長と小声で話していた。現物を見てもらうだけのようであった。

直ちに元興寺文化財研究所へ向かった。研究所では、清水課長（女性）が待っていた。平井さんと課長がしばらく打ち合わせをして、「それでは、よろしくお願いします。」平井さんが言った。目的の役目が終わって、平井さんの顔がほころんだ。「あそこは、国宝の修復なども手掛けており、安心していいですよ。」などと話した。私たちは、その日のうちに帰町した。

数ヶ月後、レプリカが完成した。どう見ても本物との区別はつかなかった。提げてみると重さは全く違った。レプリカは樹脂でできていた。制作費は、二五〇万円前後であったと記憶している。

二年ほど後であったか、北九州市から特別展に双龍環頭大刀を借りたいとの要請があった。実物を受け取りに、北九州市の学芸員が出向き、日本通運の専門車が到着した。日本通運は、運転手の外に専門の社員も同行し、学芸員とともに写真を撮り、厳重に梱包した。貸し出した私たちも誇らしい気持ちになった。

大刀が出土して間なしに、レントゲンでの透視を試みた。「刀身に文字が刻まれているかも知れない。」平井さんが言った。日曜日であったが、牧原医院で設備を貸して戴くことができた。牧原先生は、レントゲンの使い方を説明して、「ゆっくり調べて下さい。」と言って下さった。平井さんと二人で大刀を丹念に透視したが、残念ながら文字らしき影像は無かった。刀身は腐食して、ガタガタの形で浮かび上がった。

大和路はるか（久松秀雄）著「夢あのころ」から